

天理日仏文化協会こども日本語講座の取り組み

1) 天理日仏文化協会の歴史とこども日本語講座の歩み

はじめに

2006年6月、その前年に、フランスのパリにある天理日仏文化協会（以下、文化協会）の会長として、単身赴任していた夫のもとに、二人の子供たちを残して向かった。それは、伝統的に、フランスの社会が、信頼関係を築く上で、公私にわたり夫婦単位での交流が不可欠であることに加え、多忙な職務と不規則な食生活のために、体中が痛む関節リウマチを患った夫の健康管理をしなければならなくなったからである。また、その年の春まで勤めていた天理小学校での12年間の教師経験を生かして、文化協会のこども日本語講座の運営に、貢献したいという思いもあった。

当時、大学に入学したばかりの18歳の長女は、「お父さんにお母さんを返してあげる」と、病気の父を気遣って送り出してくれたが、さすがに出発の朝は、両親が海外に行ってしまう不安に、溢れる涙を押さえることができなかった。このように夫婦揃って海外へ赴任するのは、1980年から3年間、夫とともにフランスに語学留学をし、引き続いて1986年までアフリカのコンゴブラザビル出張所に勤務して以来、20年ぶりであった。

その後、2009年4月からは、夫がヨーロッパ出張所長に就任したために、出張所での務めが増え、週に1日しか出られなくなったが、2012年2月までの6年間、文化協会のこども日本語講座の熱心な現地スタッフとともに、フランスで育つ日本人の子供たちへの日本語教育に関わらせて頂いた。

外務省によると、フランスの在留邦人は、約3万1千人と発表されているが、さらに、日仏の国際結婚による配偶者や、子供たちを加えると邦人の数はもう少し増えると思われる。パリには、本校の他にも、子供向けの日本語学習塾や補習校が数校あり、郊外や地方都市の、日本人学校やインターナショナルスクールなどで、日本語を学ぶ子供たちの数も多く、保護者も熱心に支援している。

「バイリンガル」と言えば聞こえはいいが、言葉だけではなく、とりわけ、日仏の国際結婚家庭の子供たちは、家庭でも、現地校でも、社会でも、二つの文化を受け入れなければならない反面、どちらにも属せないような寂しい思いもしているようだ。私たちは、そんな子供たちの心に寄り添い、日本語を学ぶことによって、それぞれが日本人としての誇りと自覚を持って成長できることを願い、試行錯誤を重ね、より分かりやすい指導方法を考えてきた。帰国の機会に、その一端を報告することによって、外国で育つ日本人の子供たちへの日本語教育に対する何らかの指針となれば幸いである。

天理日仏文化協会の歴史

天理日仏文化協会の歴史は、教祖80年祭の旬に、フランスへの一れつ会派遣留学生として、鎌田親彦氏（山名）と田中健三氏（本荏）が渡仏したことから始まる。そして、1970年には、パリ郊外のアントニー市に、天理教パリ出張所（現ヨーロッパ出張所の前身、西村勝嘉初代所長）が開設され、翌1971年、パリ14区のダンフェールに、日仏の文化交流を目的に、鎌田

親彦氏を初代会長として天理日仏文化協会が創立された。

創立と同時に、フランス政府には、「パリ天理日本語学校」として学校登録をおこない、フランス人を対象とした日本語授業を開始した。以来、40年間にわたり、フランスでの日本語教育を率いてきた民間経営としては、最も古い日本語学校である。2007年には、「パリ天理語学センター」として、フランス教育省パリアカデミーに再登録し、現在は6代津留田正昭会長のもと、大人を対象とした日本語講座、中高生対象の日本語講座、4歳から18歳までの日本語を母国語とする子供対象のこども日本語講座の他にも、日本人を対象としたフランス語講座や、華道、茶道、書道などの文化講座や、芸術作品の展示など幅広い文化活動を行っている。その成果が日本国にも認められ、2011年には、外務大臣表彰も受けた。また、天理大学のパリキャンパスとして、相互の学生交流が始まっている。これまでに、7,000人以上が登録し、履修者の中には、外交官や政府機関として活躍している人々も多い。（詳しくは、天理日仏文化協会のホームページ参照）

こども日本語講座の歩み

こども日本語講座（以下、子供クラス）は、創立以来パリ14区のダンフェールにあった建物から、現在の1区のシャトレに移転した2000年に、当時の岩切耕一3代会長が、日本で学習塾講師の経験のあった藤原理人氏（当時、青年会本部派遣の日本語教師。現在はヨーロッパ青年会委員長、リヨンにて布教活動中）を、担当者として立ち上げた。

その後、担当者は、藤原氏から、同じく青年会本部派遣の日本語講師であった小林弘典氏に引き継がれ、現在に至っている。年齢層は、幼稚園科年中組の4歳から、高校卒業資格であるバカロレアの準備クラスの17歳までの子供たちが在籍している。そして、個々の日本語能力とともに、年令を加味して、幼稚園の年中組、年長組、小学1年生に相当する1組から10組までと、最終クラスのバカロレア準備クラス1クラスの、合計13段階のクラスに分かれて、日本語（母国語としての国語）を学んでいる。

生徒たちの約8割は、両親が日仏（日独、日伊、日西などの国際結婚の家庭も含む）の国際結婚による家庭で、約2割が、両親が日本人同士の家庭で育った、いわゆる日仏バイリンガルの子供たちであり、平日は現地校に通っている。そして、現地校が休みの毎週水曜日から土曜日の一日だけ、子どもクラスに通って日本語を学ぶのである。

指導に当たる教師は、常勤と非常勤合わせて10名で、塾や幼稚園、小学校、高校、大学、日本語学校などでの指導経験者ばかりのプロ教師集団である。そして、お互いに、各クラスで問題が起きた場合は、早急に対応を相談し合い、学期ごとの国語教師の会でも、各クラスの現状を確認しながら、本校独自の指導法やカリキュラム、教材などの研究を積み重ねている。そうした実績が、保護者の方々に評価されたと自負しているが、年々生徒数も着実に増加し、現在341名が在籍している。子供たちは、「天理の学校に行く」と、まるで「天理」を日本語の代名詞のように親しみを込めて呼び、毎週元気に通ってくる。